

## 第25回全国小学生作文コンクール

「わたしたちのまちのおまわりさん」

警察庁長官賞（高学年の部）

タイトル：母の決心、私の決心

氏名：宮崎 はづき

小学校名：東京都 私立日本女子大学附属豊明小学校 五年

四月十四日午後九時二十六分。九州の熊本を震度七という、大地震がおそった。

この熊本地震をきっかけに、私と母は、ある決心をした。

私の母は、東京で働く、けい察官だ。熊本地震が起きて、数日たったある日、母は真面目な顔で言った。

「ママね、熊本に、仕事で行く話があるの。」

「えっ急に何。熊本は余震であぶないじゃない。それに何で、行かないといけないの？」

母は、ゆっくりとした口調で、

「お母さんのしょく場から、一人女性の人が熊本に行くことになっていて、他の人は、小さい子を育てている人だからね...。」

母の話をと中でさえぎるように、私は行った。

「お母さんだって、私とお姉ちゃんっていう子を育てているじゃない。」

母がまた、ゆっくりとした口調で、

「はづきは、もう小五じゃない。ママは、はづきがお姉さんだと思って、引き受けたの。」と話し続けた。私は、何でよ、お姉さんじゃないよ。そんなの無理だよ。もしかしたら、母も死んでしまうかもしれない、と思い、むしゃくしゃして、テレビをつけた。テレビの中には、たおれた木、くずれた家、折れている電柱と、とても悲さんな光景が広がっていた。ひなん所のえい像になった。お年よりや赤ちゃん、私と同じくらいの年の子もいた。母はそっと、

「ママね、ひなん所に言って、ひ災した人に困っている事とかを聞くお仕事をするの。」

と言った。テレビを見て、母の話を聞いたら、むしゃくしゃしていた気持ちが静まっていた。母も本当は、こんなあぶない所に行きたくないはずだ。でも、困っている人を助きたい、役に立ちたい。そう思って、行く事を決心したんだ。

母が熊本に行っていた、十日間はとても心配だった。ニュースで熊本で余震があったと聞くと、心ぞうが飛び出しそうだった。

やっと母が帰ってきた日、母はつかれきっていて、ぐったりしていた。けがはないようだ。少し安心した。母がけい帯電話でとった写真を見せてくれた。それはひ災した人ととった写真だった。

「お話をした後に、わざわざ東京から来てくれて、ありがとう。一緒に写真をとって下さいって言われて、とったものなの。」

と話してくれた。写真に写っている人は、皆笑っていた。私は母がお話を聞いてあげて、皆笑顔になったのかな。と思った。

熊本地震をきっかけに、「皆の役に立つ」それが大切で、一番必要なことだ。という事を学んだ。しょう来は、皆の役に立つけい察官に絶対なって、皆を笑顔を守りたい。そう決心した。